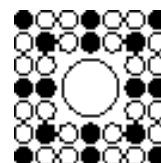


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No. 13

March 31, 2000



Message for BCJA newsletter

The new British Council Deirector Terry Toney



I am very pleased to have this chance to write a message for the BCJA newsletter. I feel very strongly that we should keep in close contact to maintain the relationship, which has grown through your experience of the UK.

I thought this would be a good opportunity to tell you about the objectives of the British Council in Japan and to explain how we have determined these. I will also mention ways in which I

think we can work together in the future to make the relationship between the British Council and alumni an active one.

The Council's main aim remains to build good relations between the UK and Japan. The methods for achieving this, however, have become more focused. The reason for this is 'a change' in the way that government thinks and works. To justify public spending levels the government insists on very clear objectives for government funded organisations, tight financial control and thorough evaluation of the results obtained by these organisations. For the British Council this means we have to be clear about our objectives and plan our activity carefully to be able to show the results we achieve. We have, therefore, moved away from general schemes such as the scholarships scheme, towards projects which have clear objectives which can be measured. Projects allow a wide range of activity including seminars, exhibitions, visits to the UK and indeed even scholarships, but these are within clear areas which our government sees as contributing to Japan-UK relations. We are currently working in the areas of education, English, the arts, Science and Technology, Governance and Society, and Information services in our centres and on the internet. (Do you know the UK NOW web site?)

Our way of working is to become a partner in projects for which we have clear targets. We can no longer work as purely a reactive funding body (a source of money). The focus of our programmes is to show modern Britain to Japan. Japanese people are already familiar with our traditions and strong heritage, but they are less

familiar with the achievements and interests of modern Britain. To add value to the British international effort the Council is required to build the UK's contemporary image. Our objectives lead us to a strong focus on young Japanese people to build relationships in the future. The question then is what about our long term contacts and friends who are not "the young Japanese"? Well, these contacts we see very much as 'partners' in our task of building close relations, between our two countries in the future.

What might this partnership mean? Well, first, a key objective for us is to develop future understanding between two countries on the basis of international education. Our Prime Minister, Tony Blair, has recently emphasised that international students are welcome in the UK and form a strong basis for future relations between our countries. We would like you to help in spreading this message. We'd like you to make the Council better known in Japan and let students, parents and colleagues know about our offices and services. The internet is a good starting point for all. We would welcome your introduction of our staff to your schools, colleges, universities and companies where there is an 'interest' in finding out more about the UK, learning English, studying overseas or examinations. We would also welcome your participation in presentations and fairs introducing UK education to Japanese students and their parents as well as your suggestions about how we might engage more young people from our two countries. You may also be aware of opportunities for good partnerships, which might result in support for students to study in Britain. Many alumni organisations for other countries generate scholarships themselves to help, and I would like to investigate ways of creating a joint fund to encourage academics and teachers to visit the UK in the future.

We now have centres in 5 cities in Japan. Tokyo, Osaka, Kyoto, Nagoya, and Fukuoka. We are currently looking at relocating our offices in Osaka and Kyoto to modernise and enable us to offer our services more conveniently. In the next year or two we will look at opening centres in one or two other cities.

I hope you can understand the changes that have taken place and that you will be sympathetic to our mission and that you will take up contact with the office nearest you and that you will feel able to work with us as partners.

「 PAST, NOW & FUTURE 」

BCJAは文系・理系・芸術系など幅広い分野にわたる高度の知識をもった人々の集りです。このような「知的財産」といべき会員の文化活動の一端をご紹介すべく、本号より「PAST, NOW & FUTURE」を新設しました。「ご自分の専門領域の活動」、「英国と自分」、「なすべきこととしたいこと」、などを個人の視点で書き下ろしていただくことを目的としたものです。今後、折りにふれ会員の皆様に本コーナーへの原稿を依頼させていただきたいと計画しておりますので、その際はなにとぞよろしくお願ひします。また、とりあげたいテーマなどございましたら編集部までご一報ください。

(BCJA ニューズレター編集部)

小池 龍太郎

いろいろのことがあったが、BCスカラーであった1960年に英国電気学会(Institution Electrical Engineers)に入会できた。それ以前には日本人会員はいなかったようだ。日本人のフェロウ会員第一号でもあるので、その後あらたに会員になった人とこれから会員になりたい人々に対するアドバイザの奉仕をしている。英国の学会は学問の団体であるとともに資格付与団体であり、正会員(Member, Fellow)はChartered Engineerとなる。これになるためにはインタビューを受けねばならないとされ、私はそのインタビューを仰せつかっている。日本ではいま技術士の制度を見直そうと、科学技術庁も文部省も学術会議も活動している。私もまた日本機械学会の中にある委員会では英国の制度を紹介するボランティアワークに参加している。「忙しい」とか「忘れた」とは心が亡んだ状態をさすから私の嫌いな言葉であるが、こんな次第でいろいろとやるべきことのある恵まれた、そしてBCへの感謝の日々を送っている。

あと3年で古希を迎えるのだが、幸いなことに、製造会社を定年退職した後の第二の人生を送る私に今、弁理士(パテント・エージェント)として多くの仕事が与えられている。主な依頼人は英国を代表するBの付く会社、なかでも通信会社のBTであり、日本国特許庁への特許出願を全て任されている。知的財産の権利化のために、標準的日本人以上に良い日本語で書かれた発明の詳細な説明とクレームつまりは権利書の素地を英文から作り上げて、立派な特許権を確立してあげるのが私の務めである。学校では教えていただけない表現を日本語にするには、原英文起草者と心の通い合うことが大切であると感じている毎日であり、本当に難有いことに、BCスカラーとして若い時に学んだことがここで生きていると思えるのである。

欧州特許庁は出願人に特許権を与えるのが仕事だと自らが言うくらいだから、比較的簡単に特許が取れるやにみえる。それに比べて、日本のエリート官僚は、私には真面目すぎるようにみえて、審査官御自身が内容をことごとく理解されないとなかなか通してはくださらないようである。ガバメントオフィサにはシビルサーバントのように「疑わしきは出願人の利益に」の思想は見出し難い。だから、英国人にとっては日本で特許が取り難いと思ってしまうようである。文化の違いと言ってしまえばそれまでだが、この違いを彼等にどう納得させるかはなかなか難しい。漢字の文化を説明し

てあげるのはその一つの手で、心が亡んだ「忙」とか「忘」とかは良く意味が通じる。料理の世界でいう味付けの順序の「サシセソ」は、砂糖塩酢は問題なく、セウコ(醤油, soya sauce)のせまではなんとか分かってもらえるが、味噌のソはそうはいかない。でも、だからこそ日本向けには特殊の味付けをと結ぶ。禅の心を詠んだという「闇の夜に鳴かぬ鳥の声きけば生まれぬ前の母ぞ恋しき」つまり五感と時間とを超越したときには人はなにを思うかの問いには、「母」との答えが帰ってくる点では共通していることを確かめた。がしかし、日本人最初のノーベル賞受賞者湯川秀樹博士がお好きだったとうかがった「白妙の富士の高嶺に煙見えて行方も知れぬわが思いかな」は上の句と下の句との間にある独特な閃きにこそ味わいがあるのだが、こういう発想の飛躍や展開は非論理的であるから、シェークスピアにもないのだそうである。ユニークな閃きがあって、この発明が生まれたことを特許出願書類に書くように勤め、そうすれば特許されますよと申し上げている。

蛇足に白足袋を履かせることになるが、私のノートから最近の話題を拾ってみることにする。技術者に限らず、最近やたらとアクロニム(頭字語)を使う人が多くて悩まされる。通信の分野ではSTDは加入者Sが幹線TをダイヤルすることDだった。今では、日本からも英国からも互いに相手を電話で直接ダイヤル呼び出しするSTDが当たり前になってしまったから、この用語は死語になりつつある。でもきっと医学系の方々、STDと聞くと別なことをお考えであろう。エイズ、クラミジア感染症などといったSTDの今日的意味を日本では、研究社のリーダーズ英和辞典が第2版(1999)になってようやく取り上げた。この辞書はcoolにmarvellousの意味を載せてはいるが、COD 9ed.(1989)のようにstreet credibility, 略してstreet-credまでは取り上げていない。職場で若い女性にクールでどんな人をイメージするか尋ねたら、素敵な人とか、格好いい人と言う返事が多いから、クールはどうやら日本でも定着してきている現代の外来語のようだ。でもホットデスクング(hot desking, COD 9ed.& 10ed.1999)はまだのようである。この言葉は、CTI(Computer-Telephon-Integrationつまり計算機と電話との統合であり、NTTの会社案内にも登場する)というエレクトロニクス最先端の技術思想と関連して出てくるときには、[仕事に合わせた機の割当て]からの意味の転化があって、机に向かって長時間座ったままで何でも用が足りてしまい、お尻の椅子が温まるような職場環境を指していると言うことをBTの第一線研究者から教わった。

言葉の移り変わりに付いて行けるのも楽しいことなのであると、自分に与えられた仕事に勤しんでいる毎日である。(Ryutaro Koike, 鈴業内外國特許法律事務所, University College, London 1959-1961)

イギリス人は幽霊がお好き(その5)

佐藤茂男

ロンドンの幽霊屋敷巡りも今回で5回目です。今回は、セント・ポール寺院近くの路地に出る幽霊と、かつてこの辺りにあったニューゲイト監獄に出没する死刑囚の幽霊の2つをご紹介します。ロンドンを訪れた際には是非この辺りを、夕方にも歩いてみてはいかがでしょう。

(1) エイメン・コートに出る死刑囚の幽霊

パタノスター・ロウ街の東端、セント・ポール寺院のちょうど東側に、エイメン・コートと呼ばれる路地がある。この路地は狭いが、とても快適なところで、鉄門にしっかりと守られている。

エイメン・コートは、いつ訪れてもとても静かで、まるで別世界に足を踏み入れたかのような錯覚をおぼえる。ヘンリー四世の治世の頃は、「パタノスター職人」《パタノスターとはラテン語で主キリストの意》と呼ばれるロザリオ職人たちがこの辺りに住んでいた。この路地は、セント・ポール寺院にすぐ近いということから、エイメン・コートと呼ばれるようになった。路地の向う端にはローマ人が建設した昔の防壁が今でも残っているが、そこが、エイメン・コート路地の庭とオールド・ベイリーとを分ける境目となっている。オールド・ベイリーはあの悪名高いニューゲイト監獄のあったところだ。現在のCentral Criminal Courtである。

防壁の反対側のすぐ近くに昔、狭い通路があったが、そこは実はニューゲイト監獄の墓地であった。罪人はさっきの狭い通路を通して歩いて裁きを受け、首をチョン切られ、再び同じ通路を戻ってきて、この墓地で生石灰をかけられて葬むられるのだった。

当時、この辺り一帯はがっちりとした鉄格子で覆われていたため、正式には「鳥籠の通路」と呼ばれていた。しかし看守や囚人たちにとっては、「死者の散歩道」と呼ぶべきところだった。やがて自分が葬むられる墓地となるであろう地面を自らの足で踏みつけながら歩いた罪人は多くいた。長い年月の間に染みついた垢で真黒く汚れた防壁が、囚人墓地と娑婆との境界線となっていた。夜中にこの防壁の上部にそって何か不可思議なわけのわからない黒いものがスーッと這うように動いていくのを見たという話が、長年にわたって報告されている。誰か重いブーツを地面にこすりながら歩いていく不気味な物音や、ガラガラと鎖を引く音が時おり聞こえてきては、暗くどことなく哀れな雰囲気漂うこの辺りの静寂を破るといふのだ。エイメン・コートに住んでいたセント・ポール寺院聖堂参事会準会員のバーラムは、一度ならずジャック・シェパードの幽霊を見たことがると1948年に語っている。彼によれば100年ほど前は自宅の窓から監獄の絞首台がよく見えたと言っている！

犯罪史上最も有名な夜盗ジャック・シェパードは、1702年ロンドンのイースト・エンド地区で生まれた。1724年の4月に捕らえられ、同年11月にタイバーン刑場で処刑されるまで、三度も逃走した。一度はニューゲイト監獄からの逃走であった。公文書記録によると、ジャック・シェパードは特に極悪な罪人用の奥深い地下牢に入れられており、150キロほどの重さの鉄製の足かせをはめられていたという。

しかし彼はそれにもかかわらず、女の仲間が差し入れたヤスリを使っていても簡単に地下牢の床の鎖をはずし、やすやすと手錠から小さな両手を抜き取った。そして、身につけていた靴下留めを使って高い所に足かせを結わえ付けた。そして煙突を伝わって逃げ、ニューゲイト牢獄の屋根の上に出て、そこから「死者の散歩道」の向こう端の防壁へと進み、エイメン・コートにヒヨイと飛び降り、まんまと自由の身となった。しかしやがて再び捕らえられ、ついにニューゲイトがシェパードにとって最後の牢獄となった。さすがの怪盗シェパードも今度こそはタイバーン処刑場へ向かうまで、夜となく昼となく終日監視されたということである。

どうやらジャックの幽霊が今でもときどき戻ってきて、大胆極まりないあのニューゲイト監獄破りを再びしてかそうとしているようだ。きっと彼は、エイメン・コートが当時とちょっと変わっていないことに気づくことだろう。

(2) オールド・ニューゲイト刑務所の幽霊たち

ニューゲイト刑務所に何人かの幽霊が出ると伝えられている。ある刑務員は、1891年12月の刑務所報告書の中で、夜遅く「死者の散歩道」近くの事務所で勤務していると、「死者の散歩道」の方角から足を引きずりながら歩いてくる人間の足音が聞こえてきたと記している。耳を澄ましていると、その足音は段々大きくなり、はっきりと耳に聞こえるようになった。最初は看守長がいつもの巡視をしているのであろうと思っていたが、しかし看守長であれば足取りがしっかりしていて、軍隊式であるはずなのに、聞こえてくる足音はまるで人目をはばかるかのような不規則な歩き方をしていた。足の不自由な人が歩くときのように、時々、足を引きずって歩いている。「死者の散歩道」へ通ずる門扉の格子窓に体をぴったりと接して、こちらの方をじっとにらんでいる真っ白い男の顔が目に入り、刑務官はびっくり仰天した。男が格子窓から離れようとした際、喉の辺りに青いまだらの打ち身があるのが見えた。刑務官が最初に思ったことは、この男はきっと絞首刑になった罪人であるに違いないということであった。やがて男の顔が見えなくなったので刑務官が門扉を開けてみたが、人間が通った形跡はなく、何ら異常なことが起きた様子はまったくなかった。その後も刑務官や他の同僚たちが足に障害のある人の歩く足音を耳にすることはあった。しかしその原因は依然としてわからなかった。物音は調べようとすると決まっていつも止んでしまう。あのお化けの顔を目撃した刑務官は、やがてしばらくして、「死者の散歩道」に葬られた最後の罪人が、なんと足に障害のある男であったことを知ったのだった。

ニューゲイト刑務所に現れたという報告のあるもう一つの幽霊は、邪悪なダイアー夫人の幽霊である。この幽霊を「女性重罪犯人用墓地」で目撃したのは看守長であった。ダイアー夫人はレディングで子供の養育所を営んでいた。彼女は養子にしてあげると親御さんをたぶらかしては金をまきあげ、多くの幼児を殺害していたという罪で1896年6月10日処刑された。幼児たちは首を絞められて殺され、キャヴァシム辺りのテムズ川に投げ捨てられていた。しかしそういう惨いことをしておきながらダイアー夫人は、平然として養子料を受け取っていた。実際、この口先のうまい老婆は、裁判

で証言人が次々と極悪非道な残酷極まりない行為について証言する間も、ニヤニヤと笑っているのであった。老婆は、結局、処刑場に送られることになったが、その途中看守長の前を通りすぎようとする際チラッと振り返り、看守長の顔をじっと覗きながら看取長に対して、「看守長、いつかまたお会いすることがあると思いますよ」と、いかにも静かな口調で言った。

あと1週間でオールド・ニューゲイトの刑務所も閉鎖されるという時がやってきた。看守長はたまたま女性重罪犯人用の墓地付近にいた。すると、暗闇の中で何か動く音がしたような気がした。看守用のガラス窓から外を覗いてみたが、墓地には人気はまったくなかった。しかしダイアー夫人が吐いた最後のことが、突然、彼の心に浮かんだ。

「看守長、いつかまたお会いすることがあると思いますよ」

次の瞬間、闇の中からヌッと現れるものがあった。それはなんとダイアー夫人の、あの陰気でキラキラ光る目、そして薄っぺらで無慈悲な唇だった。しかし、それは単なる幻覚であったのではないか。すでに数年前から女囚人たちはペントンヴィル刑務所に収容されることになっていて、ニューゲイト刑務所には女性の受刑者はもはやいなかったはずである。それなのに、しかも目撃したという看守が他に一人もいないというのに、夜中にそわそわ動き回る人間の足音や老婆の陰気な姿などを女性重罪犯人墓地で見たというのであれば、それは幻覚だったのではないか。

この他に、幽霊について研究しているサートン・ホプキンスが私に話してくれた話も思い出される。それはホプキンスがニューゲイト刑務所の奥にある礼拝堂で体験したある出来事についての話である。ホプキンスはサセックスに住む男であった。彼はしばしばニューゲイト刑務所を訪れ、暗い石造りの廊下やぞっとするような怖い回廊や奥まった地下牢などのある、巨大な建物群を調査していた。陰うつな礼拝堂へは石の階段をずっと下に降りていくようになっていた。ある時、その階段を降りてくる人間の不気味な足音が礼拝堂に響きわたった。まるで礼拝堂の床自体に邪悪な霊が染みついているかのようだった。

ある晩のこと、刑務所礼拝堂の牧師が一人で礼拝堂にいると突然、いつもは死刑囚たちが座る会衆席あたりの黒いカーテンがサラサラサラッと開き、一人の男の姿が現れた。男は黒い上衣を着ており、白粉をはいたような頭髪をしていた。髑髏のようなげっそりと痩せた顔が、暗い明かりの中でははっきりと鮮やかに見えた。

その後数週間して牧師は、1824年にニューゲイト刑務所で処刑された偽造犯人（銀行家であった）の肖像画をたまたま目にする機会があった。いつか礼拝堂で見かけたあの奇怪な顔だちの幽霊が何者であったかが、この時直ちに分かった、とホプキンスは私に語ってくれた。

* * *

今回も P.Underwood(1975)から、ロンドンシテイの古い路地や刑務所のあった屋敷跡に出没する幽霊の話をご紹介します。次回は幽霊屋敷を3箇所ご案内する予定です。お楽しみに。

(SATO Shigeo, 東北学院大学教養学部教授, University of Wales Institute of Science and Technology 1968/69)

[佐藤茂男氏の原稿は、今回と次回で3編づつ一括掲載の予定です。編集部]

イギリス人は幽霊がお好き（その6）

佐藤茂男

今回は6回目のロンドン幽霊屋敷巡りです。ご案内役は P.Underwood(1975)さんです。さあ、それでは早速出かけることにしましょう。

(1) ニュー・スコットランド・ヤード(旧庁舎)

ウエストミンスター橋近くのテムズ川北河岸に、格子縞模様をしたまるで塔のような格好の巨大な建物が建っている。それがニュー・スコットランド・ヤードである。新しい庁舎がヴィクトリア・ストリートに建設されるまでは、この有名な建物には「ニュー・スコットランド・ヤード本署」という表札が長年にわたって掲げられていた。

新築された庁舎の特別室に移されるまでは、身の毛もよだつ過去の犯罪事件関係の膨大な遺物類はメトロポリタン・ポリース・ヘッドコーターの地下室に保管されていた。そしてそこには、首のない女性の幽霊が何度も出現していた。テムズ河岸通りにあった昔の警察庁は、大昔この地にあった墓所や教会の地下納骨所の上に建っていたのだ。庁舎建設中、フレッド・ウイドボーンという大工が、薄暗い地下納骨所で包みを発見した。包みには人間の死体の一部が入っていた。当時のスコットランド・ヤードの「A」課に勤務する外科医トマス・ボンドは、死体は身長5フィート9インチほどの女性であると立証した。また遺体からは、この女性は生前栄養状態が良かったという点以外については、ほとんど何もわからないと語った。

その後も遺体の頭部が探し続けられたが、警察犬が嗅ぎつけたのは片方の脚などであった。これらの遺体を調べたボンド医師は、婦人は快適な生活環境で暮らしていた人間であると結論づけた。しかし身元の確認に欠くことのできない頭部は、その後も発見されずじまいだった。

また、フランスのある女子修道院の名前がついていた銀の十字架が女性の遺体と一緒に発見された。婦人は修道女か、あるいは慈善団体の修道女であったのかもしれない。しかし身元は依然としてわからず、どんな犯罪行為があったのか、どうして死体がこの地下納骨所に埋められることになったのかなどに関する情報もまったく得られなかった。

そんなことがあって以降、「ブラック・ミュージアム」で何年間にもわたって目撃された首のない幽霊は、実はこの女性である可能性があるのだ。

それまでスコットランド・ヤードの地下室に保管されていた過去の有名な刑事裁判の遺品は、現在「ブラック・ミュージアム」に陳列されている。特別に許可を得た来館者は係のCID員に案内され、暗く陰うつな地下の通路を通っていく。これがこんな場合にはふさわしい、何とも言えない不気味な雰囲気を与えてくれる。第一次大戦後、遺品は分類整理され、

陳列品がさらに加えられ、現在では「ブラック・ミュージアム」を研修や教育目的に利用することができるようになっている。

数年前に私が訪れた際、かつてニューゲイト刑務所で絞首刑に処せられた罪人のデスマスクのコレクションが陳列されていた。また、唾然とさせられるような、押し込み強盗に使った道具類のコレクションや、強盗犯チャーリー・ピースが所持していた合鍵、縄はしご、黒目がね、偽腕、犯人が使った武器なども陳列されていた。さらには何年間も警察から身を隠し、まんまと逃げまわっていた押し込み強盗の「フランネルフット」がかつて持ち歩いていたという同様の巧妙な道具類、ロジャー・ケースメントの遺物や偽造品の実物、信用取り込みの詐欺師が使った偽宝石類、ゴールド・ブリック詐欺事件で使われた「金の」ブロックなど、ペテン師が使った種々の賭博装置なども陳列されていた。殺人犯ロナルド・トルーが使った綿棒、バイウオーターズがトムプソンを殺す際に使ったナイフ、ランベス地区の殺人犯ニール・クリームが持っていた薬箱、クリベンが犯した殺害事件関係の品々も入っている。クリベン関係のものには、殺した妻のバラバラ死体を包むときに使ったパジャマや、犯人クリベン逮捕の際に用いられた無線電報（そういう目的で無線が用いられたのは、これが最初であった）などが含まれている。

さらに一層ゾッとさせる陳列品がある。それは二重殺人のネヴィル・ヒースがマージャリー・ガードナーを縛る際に使った乗馬用の鞭や、ジョン・ジョージ・ヘイグの最後の犠牲者となった片方の半分だけの足、胆石、入れ歯、殺害した死体を硫酸風呂に入れて溶かす際に自分を保護するためにヘイグが使った手袋やガスマスクなどである。

数年前、スコットランド・ヤードの門番が「ブラック・ミュージアム」の入り口近くに立っている一人の女性の人影を見かけた。女性は入り口のドアを開けようと近づいてきた。門番は修道女だろうと思い、用件を尋ねようと近づいていくと、その人影は消えた。彼は人影が見えた地点まで行き、びっくりして立ち止まった。振り向いてみると、さっきの人影が今度は「ブラック・ミュージアム」の反対側に現れたのである。こちらの方に顔を向けていたので、修道女らしき幽霊が身につけていた頭布に中身がまったくないのがわかった。首の上の部分がついていなかったのだ。

既に故人となっているが、ジェリー・ドーソン氏は、ロンドンで27年間も刑事警部補として勤めあげた後定年退職し、1957年に「ブラック・ミュージアム」の館長として勤務することになった。彼はブラック・ミュージアムで何度も黒い人影を見かけたことがあるが、近づいて行くとその人影は決まって消えると私に語った。人影は館内のいろんな場所に現れるので、彼自身は光のいたずらであるに違いないと考えているとも語った。

彼はまた、不思議なことに、頭髪が伸びてきたので短く切ってやると、再びゆっくりと伸びてくるという、ある殺人犯のデスマスクの話をしてくれた。そのデスマスクは、死刑執行の際に邪魔になるといっているので、処刑に先立って死刑執行人によって髭を剃り落とされた殺人犯のデスマスクであった。《これは前述のネヴィル・ヒースのデスマスクである》

館長ドーソン氏は1970年に死亡したが、それはなんと「ブラック・ミュージアム」に向かう途中のことであった！

(2) エズモンド・ロードの公営住宅の騒霊現象

チジックのエズモンド・ロードに建つ公営住宅が1956年7月騒霊現象発生の対象となった。騒ぎは、居住者ジョーゼフ・ピアシー夫妻の住宅でその極に達した。13歳になる息子などは家の外に追い出されたほどだった。ペニー硬貨、カミソリの刃、洗濯バサミなどが家の中を飛び回り、スパナーが誰もいない部屋を飛んでいき、カーテンを裂き破り窓をうち破った。

息子のデイヴィッド・ピアシーは庭で遊んでいた。1週間前にアクトン《ロンドンに近い、イングランド南東の都市》のプレハブの家から現在の家へ引っ越してきたばかりだった。するとペニー硬貨が1枚どこからともなく飛んできて顔に当たった。友だちがふざけて投げたのだろうと思い、誰もいない庭を見まわしていると、また一枚、空中を飛んできて立っていた近くの地面に落ちた。また一枚、また一枚とつぎつぎに飛んできた。

その晩遅く、ピアシー一家は部屋の装飾に余念がなかった。すると、ペニー硬貨が何枚か足元に落ちる音がした。多分いま掃除をしていたので、前に住んでいた家族の子どもたちが床の隙間に押し込んでおいた硬貨がそこからはずれて落ちてきたのだろうと思い、初めはあまり気にとめてはいなかった。すると、今度は硬貨が1枚飛んできて奥さんの体に当たった。あまり強く当たったため打ち身になったほどだった。隣に住む人たちは、石材でできていた玄関の床に硬貨が落ちる音がうるさくて困ると不満を述べた。そのうちの1枚を拾いあげると、またすぐ別の硬貨が同じ位置に現れるのであった。

主人は警察を呼ぶことにした。警官が懐中電灯をかざして前庭を探してみたところ、ペニー硬貨が何枚か発見された。

デイヴィッド君は家の中にいて、親切だが疑い深い警官から尋問を受け、答えていた。そこへ庭を捜査していた巡査が入ってきて、自分にもペニー硬貨が飛んできて体に当たったと告げた。

家族の者たちは不安な一夜を過ごした。息子が庭に出ると金属性の物体がその辺りを飛びまわった。「まるで息子が磁気を帯びているみたいだった」と母親が私に語った。翌日にはスパナーが飛んできて正面の窓ガラスを破った。息子はその時庭先に出ていたが、スパナーは家の中から飛んできたようだった。息子のデイヴィッドはバシルドン《イングランド南東部エセックス州の町》に住むおじさんのところで2、3日間を過ごすことにし、ピアシー夫妻は近くに住む親戚のところへ引っ越すことにした。そうして、家屋そのものなのか、そこに住む霊（ポルターガイスト）なのか、あるいは居住者なのかは明らかではないが、兎に角いずれかが「冷却」期間を得ることになり、その恩恵に浴することになったのだ。

その後エズモンド・ロードの住宅に騒霊現象があったという報告は、もはや聞かれなくなった。

(3) ブラックウオール・トンネルの幽霊

ヴィクトリア朝時代に建設されたブラックウオール・トン

ネルは、今なお所期の目的を果たしている。このテムズ川の下を走るトンネルは19世紀に建設されたもので、現在では2倍の大きさに拡大され、すばらしい自動車道への入り口となっている。トンネルの建設中に痛ましい事故が発生したが、近年、トンネルを利用する者にも死亡事故が起きている。事故死した者の中には、幽霊となって死の現場に定期的に現れる若者もいる。

1972年10月に一般市民に広く流布したある幽霊出現報告によると、グリニッジ側の入り口のところで一人の若者をオートバイに乗せてあげた人がいた。彼はトンネルの出口付近まで走っていったところで後を振り返り、乗せてやった若者（若者は自分の住所を教えてくれた）に話しかけようとした。ところが、驚いたことに、後部座席には誰もいなかった。そこでトンネルの中で若者を振り落としてしまったのではないかと、事故にでもあったら大変だと心配になりグリニッジ側に再び引き返した。トンネルの端から端まで4回もジグザグに走りながら調べてみたが、しかし若者の姿はどこにも見つからなかった。少なからず心配になった彼は、その翌日、若者が話していた住所へ行って見たが、その若者は何年か前に既に死んでいた人間だった。

これと同じような話が国内の各地で繰り返し報告されているが、20世紀の民間伝承を代表する興味ある現象である。

* * *

今回の幽霊屋敷巡りのツアーは、これにて終わりです。P.Underwoodさん、次回はどこに案内して下さるのでしょうか。それでは次回をお楽しみに。
(SATO Shigeo, 東北学院大学教養学部教授, University of Wales Institute of Science and Technology 1968/69)

イギリス人は幽霊がお好き(その7)

佐藤茂男

今日は前回にお約束したとおり、テムズ川南岸地区の屋敷にまつわるちょっとだけ奇妙なポルターガイストの話を3つご紹介しましょう。

(1) バタシーの騒霊現象

1956年バタシーに住む15歳になるシャーリー・ヒチンズは、ほぼ1か月にわたってポルターガイスト現象に悩まされた。騒ぎはシャーリーが寝ていたベッドに鍵が一丁、突然現れたときから始まった。この鍵は、ウイクリップ・ロードにあったシャーリーの住む家のどの錠にも合わない鍵だった。それから間もなくして、寝ていると寝具が引っばられるやら、ドアをノックする音がするやら、コツコツ、トントンと物を軽くたたく音が家中に響くやら、家具がひとりで動き出すやらの大変な騒ぎとなった。

ある晩、シャーリーはぐっすり眠りたいと思い、近所に住むリリー・ラヴさんに来てもらい一緒に寝てもらうことにした。リリー夫人は「シャーリーと私たちは一緒に寝ましたが、ひどく騒がしい音がしてきて誰も一睡もできませんでした、みんな怖くなってしまったの」と後になって語っている。

目ざまし時計や陶器の飾り物類が、誰が指を触れたわけ

もないのに動いたり、火かきが部屋を飛びまわったり、シャーリーの腕から時計が取り外されて床に落ちたりするということがあった。

シャーリーの父親のウオルター・ヒチンズが、ある夜、父親の兄と一緒に寝ずの番をし、どんなことが起きるのかを確かめようとした。この父親はロンドン市営電車の運転手だった。シャーリーは母親の寝室のベッドで眠ろうと床に就いた。しばらくは何の騒ぎもなく静かだった。ところがやがて例のコツコツと物を打つ音がしてきた。音はどうやらシャーリーが寝ているベッドから聞こえてくるようだった。コツコツ、トントンという音が長い間続いた。シャーリーはまだ眠ってはいなかった。シャーリーが寝ている体から寝具が剥ぎ取られると言ったので、父親兄弟が2人で寝具を押さえつけていたが、かなりの力で引っ張られる感じがした。その時シャーリーの両手は寝具の外に出ていた。

その騒ぎはしばらくの間おさまらず、ずっと続いた。2人の父親兄弟とシャーリーの母親は、ベッドからシャーリーが体ごと持ち上げられるところを実際に目撃した。体が硬くこわばり、ベッドからおよそ6インチほどの高さを持ち上げられていた。3人はシャーリーをベッドから降ろし、ベッドの上に立たせてみた。シャーリーは何かある強力な力が背中の中央部に押しつけられ、体が持ち上げられるのを感じたと言った。しかし自分の体が硬くこわばっていることを、自分では分かっていなかったようだった。こんな超能力による空中浮揚がみられたのは、今回だけだった。

ミステリアスなコツコツ、トントンという音は、シャーリーが働いていたウエスト・エンドの商店へバスに乗って行く際にもついていった。彼女は寝不足に悩まされ、会社の主治医のところにも連れられていった。主治医は、初めのうちは信じてくれなかった。ところが、彼自身コツコツ、コンコンと何かを打つ音を耳にしてからは、信じないわけにはいかなかった。

他のほとんどのポルターガイスト現象の場合と同様、このヒチンズ一家の騒ぎもやがて衰えていき完全におさまったものの、騒ぎの原因が一体何であったのか、それを説明できる者は一人もいない。

(2) ケニントンのポルターガイスト

1969年、奇妙な幽霊がケニントンのあるフラット《長屋》に現れ、住人の下院議員ジョン・ストーンハウスとその家族を脅かすという事件があった。前郵政大臣だったストーンハウスは10月にはそのフラットから引っ越していった。しかし彼は、それは幽霊が出たからでは決まないとかたく否定していた。ところが息子のマシューは、不可解な音がしてとても悩まされたと不満を述べた。また以前このフラットに住んでいたことのある2人の人間も不可解な音がしたり、物が壊われたりという騒霊現象が活発にみられたと供述している。

その一人、レストランを経営するピーター・ノーウッドがフラットから引っ越したのは1969年3月のことだった。ノーウッド氏によれば、入居後の2、3か月ほどの間に奇怪な出来事が何度も起きたというのだ。中でも、枝編みの籠が幾度となく空中を「ふあーっと浮動」したり、ドアというド

アが何の理由もなく開くということがあったことを今でも覚えていた。彼はどうしてこんな奇妙なことが起きたのか、その訳を理論的に説明することはまったくできないと言っている。

このフラットで騒霊現象があったと証言するもう一人は、渉外・宣伝の仕事をしていたピーター・アールだ。彼はピーター・ノーウッドとこのフラットで同居していた。ピーター・アールは、ある夜、友人3人とブリッジ遊びに興じていた。すると開けばなしにしていた窓から何か「灰色をしたもの」がスーッと出ていった。3人全員がそれを目撃した。

ピーター・アールもまた枝編みの籠が浮動する現象を見た体験を今でもはっきりと覚えている。枝編みの籠がいくつも「拾い上げられ、部屋の向こう側へ強くほうり投げられた」かのように見えたが、ただ浮動している籠の近くに人間は誰もいなかったと言っている。

(3) ラングミード・ストリートの騒霊現象

ウエスト・ノーウッドのラングミード・ストリートで不思議なことが起こり、数年間にわたって8名の居住者全員の健康が侵されるという騒ぎがあった

グリーンフィールド一家は1947年6室からなるこの家に引っ越してきた。しかし一家は引っ越し後間もなくして、コツコツという音に悩まされた。物音は屋根裏から始まり、だんだん大きくなっていき、やがて石が砕けるような、重い家具でも落下したかのようなものすごい騒音となる。

最初の頃は、鳥かネズミであろうと思っていた。しかしいくら調べても、人間が誰も住んでいない屋根裏には鳥やネズミがいる形跡はまったくなかった。そうこうしているうちに物音がますます大きくなっていき、鳥やネズミのような生き物が発てたに足らずは大きすぎる音になっていった。

時は過ぎていった。しかし騒音は依然として止むことはなかった。それどころかもものすごい物音がすることがしばしばあった。それは常にドキッとする音だった。しかしやがて物音は静まり、数週間ほどして再び鳴りだすのであった。1951年の7月、26歳になる息子のセスルは、夜中に寢室のドアの外で何か動く音がして目を覚ました。家族の誰かが具合でも悪くしたのかなと思い、ドアを開けて見たが、あたりはシーンと静まりかえり、踊り場には誰もいなかった。すると、何か階段の曲がり角を曲がってくるのが目に入ってきた。背は高く、青白く、首はなかったようだ。アッ、こっちへ近づいてくる！

セスルは恐怖に襲われ、背筋に冷たいものが走るのを感じた。お化けがもう自分の体に接触しそうな距離まで迫ってきたとき、彼はやっとのことでどうにか声を出すことができた。

セスルがキャーッと叫びをあげると、お化けは消えた。両親、妹のバット、弟のデニス夫妻、そしてデニスの妻の両親などがみんな寢室の外に出てみると、セスルは青ざめ震えていた。彼が何かを目にしびっくりしたのは明らかだった。それから数日たったある日の夜、弟のデニス夫妻が夜遅く帰宅した。玄関のドアを開けると、数日前にデニスが目撃した、なんとあの、あの青白い顔のないノッペラぼうのお化けが、狭い玄関先の廊下に静かに立っていた。びっくり仰天した夫妻はあわてて隣の家に駆け込んだ。それから近所の人たちと

連れだって戻ってみると、お化けは最早どこにもいなかった。

ある日の午後、今度は妹のバットがお化けに出会うことになった。恐ろしい人影が突然現れたかと思うと、不可解なことが次々と起こる。不安を感じたグリーンフィールド一家はついに警察を呼ぶことにした。警察当局も、どうしてそんな不可解なことが起こるのか、その原因をつきとめることができなかった。そこで一家は、夜は友人宅に避難することにした。警察は屋敷を常時見張っていた。そんなある晩のこと、9人の警官が屋内で見張っていたが、9人とも屋根裏から聞こえてくるコツコツ、ドンドンという物音を耳にした。空っぽの屋根裏を調べてみたが、物音の原因が何なのかを説明できる物証は何ひとつ見当たらなかった。ベッドからは羽根布団が取り外され、絵が床の上にバラバラになって落ちていた。しかし絵を吊していたヒモや留め金は、何の異常もなく元のまま壁に残っていた。

警察の捜査が、警部補シドニー・キャンドラーの指揮の下にすめられた。警部補は「はじめは懐疑的だったが、今は確かに奇怪なことがこの屋敷で起きていると思っている」と語ったと伝えられている。

警察は奇怪な騒動に対して何ら援助することもできず、またそれを未然に防止することもできず撤退した。だがしかし、その後も依然として不可解なことが起きた。扉を閉じているはずの戸棚の中のスプーンがカタカタカタと砂糖壺の中で鳴る。ところが戸棚のガラスや裏張りが何者かによって壊されているというわけでもなく、まったく元のままである。大きな絵画が額縁からはずれて落下する。かと思うと、誰も入っていないはずの部屋に置いてあった買い物籠が、部屋の一方の端からもう一方の端へ移動しているという有り様。家族の者は二階へ行くのを怖がり、ベッドを二階から一階《日本式では二階が三階、一階が二階となる》へ移動することにしたが、しかしそれでも眠ることができなかった。

ある時、他家に嫁いだ娘が母親のグリーンフィールド夫人が帰宅するのを新聞記者と一緒に戸口の昇り段のところで待っていた。2人は帰ってきた母親に、鍵がかかっている誰もいない家の中からカタカタという何かの音がすると伝えた。母親が玄関のドアを開け家の中を見ると、大きな家具が動かされ、鏡は正面を壁に向けた状態で掛けられていた。

居間でパッと光る閃光を、家族全員が目にするという事件もあった。また、ラジオのスイッチがひとりでもついたり切れたりもした。マットレスが空中に舞い上がり、丸く巻きついていった。あるいはまた、台所の野菜や調理器具類が寢室のあちこちに散らかっていたり、書籍類がそこいらじゅうにほうり投げられ破れていた。しかしその騒ぎも突然止み、すっかりおさまってしまった。幸いグリーンフィールド一家に他所へ引っ越す機会がやがて訪れ、早速引っ越すことになった。ところが、その後に入居してきたヒューイト夫妻と4人の幼い子供たちがこんな奇怪な騒霊現象（それが何であるのかは分からないが、ともかく4年以上にわたってグリーンフィールド一家を悩ましてきたあの怪異現象）に悩まされるようなことは、まったくなかった。

(SATO Shigeo, 東北学院大学教養学部教授, University of Wales Institute of Science and Technology 1968/69)

ニュースレター編集部より自己紹介

西田宏子 根津美術館次長

BCJA の役員会に参加してから、10年ほどは経っているように思います。これは、女性を積極的に登用したいとの要望に、素直にお応えしたためでした。BC のお陰で現在このように仕事をされていると常々思っていたこともあって、私の仕事が忙しいとの理由ではお断りすることが出来ない気持ちでした。

どのように留学したのかについては、BCJA の本にすでに書いてしまいましたので、現在の仕事について御紹介申し上げます。根津美術館は港区南青山にあり、七千坪ほどの庭園をもち都心のオアシスとも言われています。東洋美術がコレクションの核といっていて、年間に十回ほどの展覧会をいたしております。特徴のひとつが、日本および中国・朝鮮美術を海外の方々に紹介するため、英語での作品解説(guided tour)を催していることです。ときには英語での講演会もあり、在京の外国人には喜ばれております。また、土地柄から海外からの国賓方の来館も多く、御案内することで日本美術の広報に努めております。会員の皆様で、海外からのお客様に日本美術や、庭園を案内したいとお考えの折には、是非一声お掛け頂きたく存じます。

小さな美術館の仕事は、一種のサービス業であるために研究、教育、展示活動とともに普及にも努めねばならず、忙しいことは言うまでもありませんが、このサービスの気持ちで、出来るかぎりのお手伝いをしようと、今回は BCJA のニュースレターの編集にも関わることになりました。なかなかゆっくりと編集のお手伝い出来ないのが、辛いところですが、お役に立てるよう努力いたします。

美術館でも将来を見越して、ホームページを開設しております。美術館から皆様に日本美術への御理解を深めて頂けることを希望しておりますので、是非見て頂き、さらに御来館いただけることを期待しております。

青柳昌宏 電子技術総合研究所主任研究官

BC より英国物理学研究所での在外研究をサポートしていただいたのが縁で BCJA の活動に参加するようになりました。現在、ニュースレターの編集作業を微力ながらお手伝いしております。

紙面を借りて、研究の紹介をさせていただきます。専門は、超伝導エレクトロニクスという分野で、超伝導体を利用した電子技術全般に関わっております。御存知のように現在の情報化社会は、半導体を利用したコンピュータ、携帯電話などの電子情報機器により成り立っております。しかし、今後予想される情報量の爆発的増加に対して、機器の性能向上が追いついてきておりません。光ファイバーに代表されるように光技術の進展も期待されておりますが、光技術だけでは、すべての処理を行うことができないため、電気情報を扱うための革新的技術も必要とされております。その一翼を担うと

期待されているのが、超伝導体を利用した電子情報機器です。

超伝導体の特長は、非常に低い温度で動作するためエネルギーの消費が少なく、大量の情報を素早く処理したり、送ったりすることができる点です。超伝導体を利用した電子機器の開発は、着実に進んできております。電波天文台のアンテナに使われる超伝導ミキサ素子、脳からの微弱な磁場を計測するための超伝導脳磁計、高エネルギー分解能を誇る超伝導 X 線検出器など実用レベルにあります。私は、現在、ピコ秒の時間分解能を持つ超伝導オシロスコープの開発に注力しているところです。

幅広く社会において、超伝導体を利用した電子機器が使われることを目指して、研究に取り組んで参ります。皆さまのご支援をいただければ幸いです。

(Masahiro Aoyagi, 電子技術総合研究所電子デバイス部、National Physical Laboratory 1994-95, aoyagi@etl.gp.jp)

[編集後記]

恒例のニュースレター春号をお届けします。本号では、新駐日代表のトニー氏に原稿をいただきました。What we can do for you?という問いかけへのお答でもあります。また、新企画、Past, Now & Future は、いかがでしょうか。いろいろな分野で活躍されていらっしゃる会員の皆様の、このコーナーへのご投稿を歓迎します。新代表にかわった機会に、これまで British Council に依存していた発行業務(印刷・発送)が BCJA でおこなわれることになりました。人手や費用の面で BCJA に負担がかからぬよう、今後電子メールなど、新しい発行形態を模索していきます。お金や人手をかけずに、いかによい情報を提供していくか、皆様からのよいお知恵を拝借できれば幸いです。本号では情報提供の一助として British Council のニュースレターを同封しました。BCJA 事務局は、新しく清水路子さんが担当することになりました。本号の封筒は清水さんのご尽力で British Council から寄贈していただいたものです。次号では、大和日英基金、スワイヤスカラシップなど日英交流や留学などの支援をおこなっている団体の紹介を予定しております。留学や奨学金等に関する最新の情報をお知りになりたい方は、トニー氏からご紹介ありましたホームページ <http://www.uknow.or.jp> をご覧ください。このニュースレターが、これまで通り皆様のお役にたちますよう、ご投稿、ご助言、ご提案などよろしく願います。

(瀬川彰久、北里大学医学部解剖、Imperial College 1989, segawa@kitasato-u.ac.jp)